ボランティアに参加しよう

広島県呉市天応地区では、まだ土砂が積もったままの家屋が多く残る。(9月1日撮影)

今年は自然災害が多く、被災地の復興に向けたボランティア活動の報道をよく目にする。
西日本豪雨の被災地では土砂のかき出しや瓦礫等の撤去に人手が不足しているため、災害ボランティアの募集は現在も続いている状況だ。
そんな中ボランティアの参加を考える読者に向け、本記事ではシティライフ記者が参加した際の体験も交え、参加方法を紹介していく。

広島県呉市にボランティアに訪れる

今回訪れた被災地は、シティライフが主催するイベント「ロハスフェスタ広島」の開催地からほど近い広島県呉市にある天応地区。まず参加するにあたり、インターネットで詳しい情報を収集した。「くれ災害ボランティアセンター」のホームページにたどりつき、具体的な募集内容を確認できた。現地の受付場所や時間、作業内容、当日の服装、持ち物などが詳細に紹介され、ボランティアの心得も掲載されている。また、事前に自治体などがボランティアの受入れを承諾した場合、「災害派遣等従事車両証明書」が交付され、自宅から現地までの往復の高速道路の費用が免除されることもわかり、申請した。

「災害派遣等従事車両証明書」は、まず現地のボランティアセンターから承諾書を受領し、ボランティア参加者が移住する市役所で発行の手続きをする。高速道路は無料で利用できる。※9月30日までの予定。

当日は受付を呉市役所で済ませ、ボランティアを要請した人の家屋にそれぞれ2〜10人ほどのチームに編成される。しかし訪れた9月1日は、大雨で屋外での作業は中止となり、そのため市役所内でボランティア関連の書類や報告書を整理し、またボランティア用の資材置き場の清掃を実施することになった。作業報告書の記載内容では、日ごとに作業完了の文字が多くなっているものの、まだまだ日数のかかる家屋もあった。ただボランティアの数も日ごとに減っていることがわかった。

ボランティア参加者の地域はさまざま。遠方の東北からの参加者も多く「困ったときはお互い様、東北大震災の時の恩返し」と報告書には綴られ、ボランティアの輪が広がっているのを感じた。

災害ボランティアの服装や携帯品も「レスキューストックヤード」のホームページでわかりやすく紹介されている。

芦屋あおぞら子ども食堂
世代を越えた地域交流を

芦屋市の宮塚公園にて、市民団体フライパン主催の「芦屋あおぞら子ども食堂」が8月19日に開催された。兵庫県の「地域祖父母モデル事業」の一環で、地域の子どもたちに無料で食を提供する同市初の“子ども食堂”だ。子どもたちに生産者や栄養、農法などについて知ってもらう“食育”と、スタッフとしてシニアにも多く参画してもらうことで、地域の子どもたちとシニアの顔が見える関係をつくることを目的としている。初回の今回は、子どもたちに果物本来の甘みを知ってもらうため、果物と甜菜糖だけを使った手作りシロップをかけたかき氷が提供された。主催の横山宗助さんは「食以外にも、シニアと子どもが一緒になって遊べるコマ回しやけん玉、シャボン玉などの昔遊びをさらに充実させていきたい」と話す。雨以外は公園での開催を基本としており、公園の新たな活用方法としても期待したい。

次回は10月7日に開催予定。できる限りオーガニックな食材にこだわりながら、スープとパン、ご飯と味噌汁などを提供していく予定。

まんが「兵庫の歴史」を作成

県政150周年のHPにもアップされている。
http://hyougo150.jp

兵庫県は、県政150周年記念事業の一環として「まんが『兵庫の歴史』」を作成。県内すべての学校や公立図書館などに8,000部を配布した。制作は、神戸芸術工科大のまんが表現学科に委託。未来の兵庫県からやってきた中学生が、タイムマシーンに乗って150年の歴史を体験していくというストーリ。小さな県として誕生し、二度の統廃合を経て、五国からなる現在の兵庫県が成立した歴史をわかりやすく伝える内容となっている。各地域の歴史文化や特産なども紹介しており、担当者は「神戸阪神間だけでなく兵庫県全域に目を向けてもらうきっかけになれば。漫画を読んだ子どもたちの手で、次の200周年につなげてほしい」と話す。

新進気鋭の写真家・ヨシダナギさんが登場
フェリシモ「神戸学校」

フォトグラファーヨシダナギさん。
10月はフードクリエイター・小桧山聡子さん、11月は蝶使い・道端慶太郎さんが登壇予定。詳細や申し込みは、神戸学校のホームページにて。

通販会社・株式会社フェリシモ(神戸市)が毎月開催する講演会「神戸学校」8月の回に、フォトグラファー・ヨシダナギさんが登場した。アフリカをはじめ世界の少数民族を撮影する写真家で、5歳でアフリカに魅了され、23歳で単身渡航。その類稀な色彩感覚に加え、直感的な生き方でも注目を集め、今春ベスト作品集「HEROES」を発行した。今回の講演会では、撮影秘話をはじめ、人生哲学にも迫る興味深いトークに、全国からファンが来場した。

大震災がきっかけに社会貢献と社員教育

神戸学校は、社会貢献と社員教育を兼ねたプロジェクトだ。「経験と言葉の贈り物」をコンセプトに生活文化の発信を目指し、建築家やデザイナー、作家、音楽家、起業家など、様々な分野の第一線で活躍するゲストを招き、講演会を行っている。きっかけは、1995年の阪神淡路大震災。「崩壊した建物の修復はできなくとも、人々の心の復興につながることをしたい」との思いから、1997年4月に開始して以来、20年以上継続している。講演会にかかる費用は同社が全額負担し、収益は全額あしなが育英会を通じ、東日本大震災遺児への支援に充てている。企画・運営は入社1、2年目の社員が中心となって行う。広報の市川美幸さんは「当社は通販会社なので、お客様と直接触れ合う機会がほとんどありません。新入社員が神戸学校で来場者を迎え接客を経験することで、お客様目線で考えるきっかけになっています。また、第一線で活躍する講師の話は、新入社員にとっても刺激や感動、新たな視点を発見し、仕事面でもよいクリエイションにつながります」と話す。

イベント当日、司会を務める同社の新入社員。企画・運営も行う。

今年のテーマは「超・好き〜好きの向こう側」。“好きを超える”ものを見つけてほしい、という意味を込めた。市川さんは「ヨシダさんは、私たちが一生会えないかもしれない少数民族のことを近くに感じさせてくれました。彼女の壁を作らない心が、当社の理念である“ともにしあわせになるしあわせ”と通じるものがあります」と感想を語った。

特殊詐欺被害防止 〜「言わない・渡さない」暗証番号とキャッシュカード〜

協力:兵庫県警察

振り込め詐欺を始めとする「特殊詐欺」の被害は依然として後を絶たない。

最近、キャッシュカードをだまし取り、コンビニや銀行などのATMでお金を引き出す手口が多く発生している。犯人の手口を知って、被害を未然に防ごう。

【 ケース1 役所の職員を騙る犯人の手口 】

「○○市役所の者です。還付金がありますので、後ほど金融機関の職員から連絡があります」といった内容の電話がかかってきた後、「△△銀行の者ですが、キャッシュカードが古いので、還付金の手続ができません。カードの交換を行います」と連絡が入る。金融機関の職員を名のる者が家を訪れ、暗証番号を聞き出し、「キャッシュカードを預かります」と言って、カードをだましとる。

【 ケース2 警察官や百貨店の店員を騙る犯人の手口 】

警察官や百貨店の店員を名乗る者が電話で「あなたのカードを他人が使っている。個人情報が漏れている」などと言って不安をあおる。警察官や銀行協会などを名乗る者が家を訪れ、暗証番号を聞き出し「あなたが今持っているカードは危険なので、安全なものと交換します」と言って、キャッシュカードをだましとる。

特殊詐欺の被害に遭わないために

- 「還付金」「払戻し金」の話には要注意。
- 警察官や金融機関の職員がお金やキャッシュカードを預かることはないので、絶対に渡さない。
- 個人情報や暗証番号は他人に教えない。
- 電話で「お金の話」「カードの話」が出たら、家族や友人、警察に相談を。